



第41号

2020年
慈英病院
広報誌

真心込めた医療を提供し、皆様に愛される病院を目指します。

新型コロナウイルスへの対応

現在、「新型コロナウイルス感染拡大」が一番の社会問題となっています。すでに、全世界で240万人以上の感染者と16万5千人以上の死亡者が出ており、国内においても都市部を中心とした発生が地方へと広がりを見せている現状にあり、一部の都府県で発令した緊急事態宣言を4月16日に、全47都道府県に拡大することになりました。しかし、現在も12000人以上の感染者と250人以上の死亡者が出るなど、沈静化の兆しは見えない状況です。（2020.4.22現在）

当院では、感染対策として、3月11日より、開院以来初めての面会制限に踏み切りましたが、すでに1か月以上が経過しております。

ご家族の皆様には、「自分の親の様子を直接確認できない」「洗濯物の受け渡しの際に、職員をわざわざ呼び出さないといけない」など、様々なご迷惑を強いており、本当に申し訳なく思っております。

しかし、今回の肺炎は、今まで経験したことのない程の重篤な病状と社会混乱を引き起こしています。

医療の現場で困ることは、この肺炎は特徴的な症状に乏しく、いわゆる普通の「カゼ」と鑑別するのが困難な事や治療薬が無い点です。個人で出来る対策としては、①人が多く集まる所を避ける。②定期的に部屋の換気をする。③マスクをする。（注意点は、鼻がマスクより出ない、合うサイズを選ぶ、N95マスク等の高性能マスクは長時間の使用には呼吸が苦しくて適さない。）④うがいと手洗いをを行う。（意外と効果高い、可能ならペーパータオルの使用、無理なら手拭きのタオルは個人で分ける。）⑤体温を毎日測定する。など一般的なことです。

今後、終息までに、どれほどの期間を要するかは予測すら不可能ですが、感染防止に対する意識を各自持ちつつ取り組んでいきましょう。

（院長 前田正存）

働きやすい職場づくり

今日、労働力確保が喫緊の課題とされ、誰もが働きやすい職場環境の整備が求められています。

宮崎県は、ワークライフバランスをさらに促進し、県内企業の労働力確保を図ることを目的として、県内企業に対し、『仕事と生活の両立応援宣言』の登録推進を図ってきました。

この宣言とは、企業・事業所のトップの方から、従業員が仕事と家庭の両立ができるような「働きやすい職場づくり」の取組みを宣言してもらう制度です。

これにより、①企業のイメージアップ ②職場の活性化 ③優秀な人材確保への効果が期待できるというものです。

現在、県内企業（事業所）1,197件がすでに登録しており、当院も昨年仲間入りさせて頂きました。

（次ページに続く）

【当院の宣言】

- 一、家族の病気など、急な休みの時は、他の職員でサポートします。
- 一、有給休暇取得率 100%を目指し、取得しやすい職場環境づくりに努めます。
- 一、女性の育児休業の取得率 100%を維持します。
- 一、男性の育児休業を取得しやすい職場環境を整え、更なる取得促進をします。
- 一、育児・介護休業中社員の、復職への不安を減らす相談体制を整えます。

これら宣言をすることで、様々な労働環境の改善が図られたこともあり、有給休暇取得率アップ、離職率低下、さらには患者満足度のアップに繋がる結果となっています。

今後ますます、人材獲得難が続く医療界において、ワークライフバランス（仕事と生活の調和）の充実こそが、医療の質を向上させるための手段のひとつではないかと考えます。

私達は、この職場環境を次に繋ぎます

看護部介護主任の荒竹浩和と申します。

一昨年に職場恋愛の末、結婚しました。仕事と家庭との両立は想像した以上に大変だ感じていました。妻が妊娠しつわりで体調が悪い日も多くありました。しかし、職場の仲間が、「毎日、患者さんの安心や幸せを提供する為にケアをしています。だからこそ、自分達の生活も安心して暮らせる生活でなければならない。そして、幸せでなくてはならないのです。」と言ってくれました。体調の悪い時は年次有給休暇にて体を整えることも出来ました。現在も育児休業で子育てをしています。私達は、日々病と闘っている患者さんのケアはとても大変です。職員が1名休むことで日々の業務負担が増え、心苦しいこともありました。しかし、自分達が次を支援していくことで、働きやすい職場が受け継がれ、職員の幸せも膨らんでいくと思います。私達は、この職場環境を必ず次に繋いでいきたいと思っています。

今後ともよろしくお願い致します。



在宅療養支援室

昨年10月より、新しく開設された『在宅療養支援室』に勤務させて頂いております、日高万明と申します。これまで、大学病院、こども病院、一般病院（急性期、慢性期、回復期病棟）、訪問看護ステーション、介護老人保健施設等、多方面に渡って、看護職、事務職として勤務してまいりました。あと数年で還暦を迎えることにはなりますが、やる気&情熱は、まだまだ健在です。これから、さらに地域に根差した慈英病院づくりのための一員として、精一杯、明るく、元気に取り組んでいきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

活動としては、当院を退院し、自宅や施設などで暮らしておられる方々が、退院後も安心して生活が送れるように、多職種（地域）と連携を図りながら支援することです。

また、病状悪化など、病院受診、入院等が必要になった場合など、当院地域連携室等と連携を図りながら、受診、入院調整を図っていくことを主としています。

その他、地域で行われている健康教室や講演会などの協力や講師派遣等も行っています。



在宅療養支援室業務



♪♪ いつかは誰でも この星にさよならをする時が来るけれど 命は継がれていく ♪♪

これは、竹内まりやの『いのちのうた』の一節です。メッセージ性の強いこの曲との出会いは、自身のこころの励みとなっていると言っても過言ではありません。

職業柄、これまで数多くの患者さんの臨終（臨命終時）の場に立ち会ってきました。

死は、この世に生を受けたものすべてにとって避けようのないものです。

唐突な問いかけかも知れませんが、皆さんは、どこで最期を迎えたいですか？

そして、誰に看取ってもらいたいですか？

しかし、確固たる死生観があったとしても、残念なことに自身の希望に則した最期が迎えられるとは限りません。現に、ドラマのシーンのような『愛する家族（人々）に看取られながら旅立っていく。』というような理想的な最期に、これまで立ち会う機会は少なかったようにも思います。

残された家族にとって、その場に間に合い、立ち会うことができることには大きな意味があるとは思いますが、中には、震災や災害によって、突然、命を落としたり、さらに、行方不明者として、誰にも発見されずにいたり、最近では、新型コロナウイルス感染によって最期の姿を見せることさえ許されなかったりと、家族にとっても、つらい最期になるかも知れません。

再び、『いのちのうた』の一節、♪♪ 生まれてきたこと 育ててもらえたこと 出会ったこと

笑ったこと そのすべてにありがとう この命にありがとう ♪♪

この歌の想いは、人間にとっての幸せの原点は、家族や人々と共に「ささやかな日常」を過ごすこと、「生かされていること、育ててくれた両親に感謝すること」に尽きるということのようです。自身の最期がどうであろうと、どんな想いをもって生きたかを、家族に届けられたらいいのかなと思います。

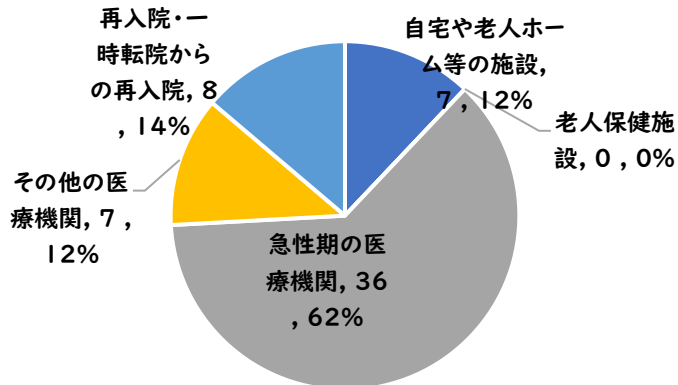
人の幸せを願い、人の不幸に寄り添い、支える「利他の心」をもって、残りの人生、送っていかれたらと思います。ふるさとの夕陽は、今日も綺麗でした・・・。



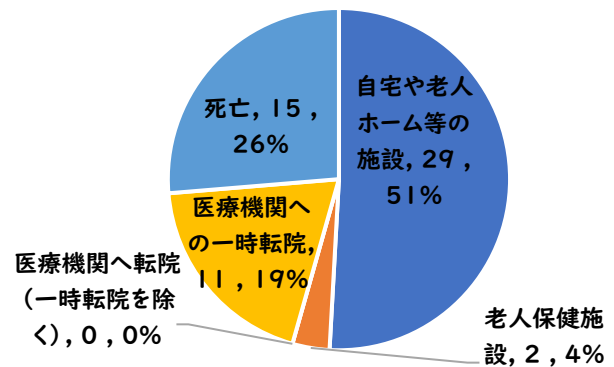
大淀川

クリニカルインディケーター 2020 年(令和 2 年)

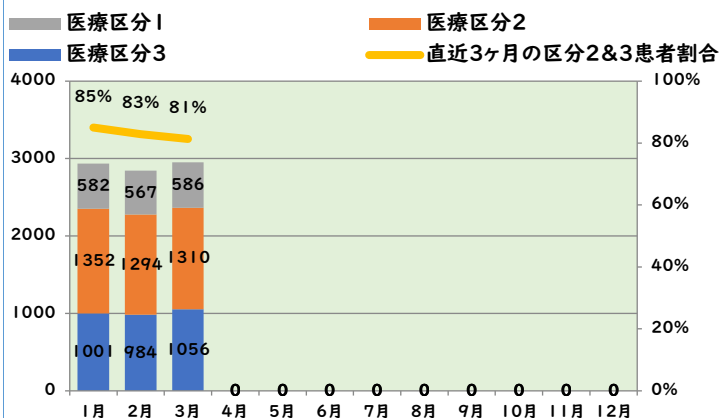
前方連携の状況（令和 2 年）～3 月 n = 58



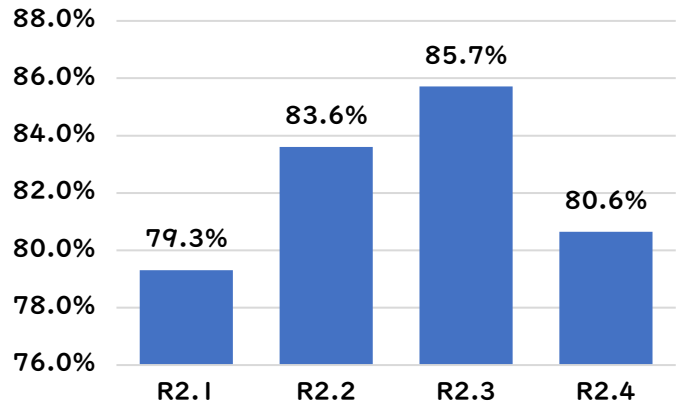
後方連携の状況（令和 2 年）～3 月 n = 57



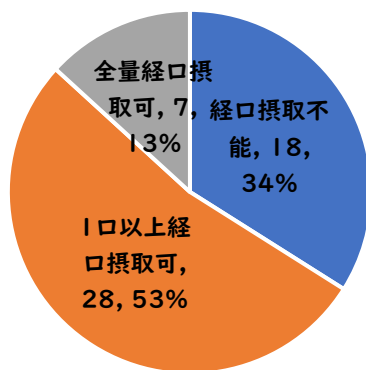
医療区分別入院患者の割合（令和 2 年）



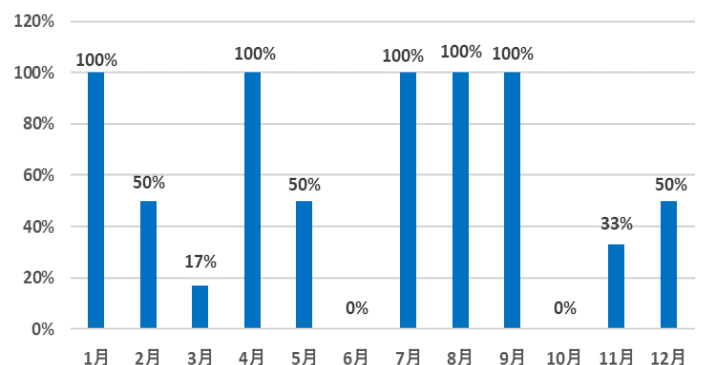
在宅復帰の状況（令和 2 年）（≥50%）



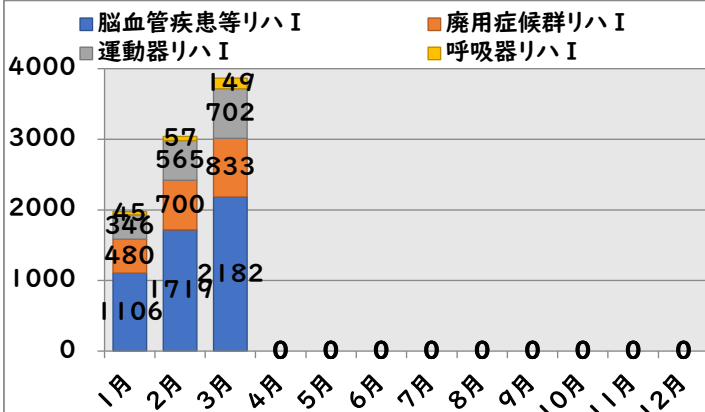
胃瘻・経鼻経管から経口摂取への移行（令和 2 年 2 月）



入院時、尿道カテーテルが留置されている患者の1ヶ月後の抜去率（R1. 1月～12月）



疾患別リハビリテーション実施単位数（令和 2 年）



軽快退院患者における F I M 値（令和 2 年）

